THE AGE OF UNCERTAINTY

不確実性の時代

ジョン・K・ガルブレイス著
都留重人監訳

THE AGE OF UNCERTAINTY
不確実性の時代

●ジョン・K・ガルブレイス著
●都留重人監訳

TBSブリタニカ

都留重人（つる　しげと）
1912年，東京に生まれる。1935年，ハーヴァード大学卒。一橋大学学長を経て，現在，一橋大学名誉教授，朝日新聞社論説顧問，国際経済学協会会長。
著書　『都留重人著作集』（全13巻）
訳書　サムエルソン『経済学』（上下）
　　スウィージー『資本主義発展の理論』
　　シュンペーター『帝国主義と社会階級』
　　ハンセン『財政政策と景気循環』
編著　『世界の公害地図』ほか多数

不確実性の時代
1978年2月20日　初　版
1978年3月27日　十二版

訳者――――都留重人
発行者――――吉田　稔
発行所――――株式会社ティビーエス・ブリタニカ
　　東京都千代田区三番町28番地1　秀和三番町ビル
　　郵便番号102　電話(03)230-0311
印刷・製本―凸版印刷株式会社

© Shigeto Tsuru, 1978

0033-200025-4968

落丁・乱丁本はお取替えいたします

はじめに――『不確実性の時代』について

とりたてて言えば、あの「ウォーターゲート」大事件だけが私の心を占めていた一九七三年の夏のある日、私はロンドンに本拠をもつBBC放送のアドリアン・マローンの来訪を受けた。彼は、テレビジョンの連続番組で、特に局側から注文は出さず私まかせの経済史ないしは社会思想史の放送を引き受ける意思があるかを探りにきたのである。

彼のこの訪問は、私にとってはまたとなく好都合な時期のものだった。ハーヴァードの教授たちは、昔の「ピルグリム」の時代にまでさかのぼる慣習なのだろうが、自分が学生を教えることにどれほど深い愛着をもっているかを表明しなければならないことになっている。その講義の退屈さを証明するかのように聴講者の数が減ってしまっている教授連でさえ、この義務に対する己れの献身がいかに大きいものであるかを、教官食堂で感動もあらわに話すのだ。こんなごまかしを続けることに、私は日増しに困難を感じていたのだった。一度ならず私は、むきになって話す若い教師たちの顔を不快な気持で見つめている自分に気がついた。許すべからざる発想だったかもしれぬが、私は、大学をやめようかと考えていたのである。なぜ大学などさっさとやめて、不特定多数のテレビジョンの聴衆に体当りしてみないの

か。テレビ講座では、視聴者がスイッチを切る音など聞かずにすむとのことだし、一人が居眠りをしはじめ、二人ばかりが聴講を中止したからとて、なんの影響があろう。一日の仕事で疲れた人かもしれず、恋愛のほうが大事だったのかもしれぬ。それは、私などの知ったことではない。あまりもったいぶった躊躇もせず、結局私はBBCの申し出を引き受けることにした。私は、アドリアン・マローン、ディック・ギリング、ミック・ジャクソン、デーヴィッド・ケナードの面々とスタジオに座ったが、彼らは爾後三年にわたって、この企画に関し私にとっては常に、また真に畏敬すべき僚友であった。

われわれは、早々とこの番組のタイトルを「不確実性の時代 The Age of Uncertainty」と決めた。まず言葉の響きが良かったし、思考の場を局限もしなかったし、それでいて、基本的なテーマは明らかにしていた。すなわち前世紀の経済思想の中にあった確固たる確実性を、現代のもろもろの問題が直面している抜きがたい不確実性と対比させえたのである。前世紀では、資本家は資本主義の繁栄に、社会主義者や帝国主義者は、それぞれ社会主義、帝国主義の成功に確信をもち、支配階級は、自らが支配者たるべく運命づけられていると認識していた。こうした確実性は、今やほとんど残っていない。人類が現に直面している諸問題の驚くべき複雑さを考えるなら、前世紀の確実性が残っていると考えるほうが、かえっておかしいくらいである。

われわれの論議が進むにつれて、さらに別のテーマが浮かび上がってきた。それは、思想はそれ自体が重要なだけではなく、社会的行動を説明ないし解釈しうるがゆえに大きな意味をもつという、別に新しくもない考えから発したものである。それぞれの時期の支配的思想とは、人びとや政府がそこに指針を見出すような思想である。だから思想が歴史そのものを形成するのに一役を買う。市場の力や国家権

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

力の危険性について人びとがどう考えるかということが、どんな法律をつくるか、またはつくらないかということに関係してくるし、また、人びとが政府に何を期待し、市場の力にどこまでを任せるかという問題と深くかかわってくる。したがって、きわめて大ざっぱにはなるが、われわれの思想のとらえ方は次の二つに分けられると思う。つまり、最初に人と思想が存在し、次に思想の帰結が到来することになる。まずアダム・スミス、リカード、マルサスが登場し、次いで彼らの体系が、イギリス、アイルランド、新世界にどのような影響を与えたかという問題である。先に経済思想史が論ぜられ、続いて実体経済の歴史がとりあげられることになる。

この区分けは、番組の初めのほうでなされ、本書の最初の部分でも同様だが、作業の全体を通じても、この区分けによる順序は大体において守られる。話が多少進んだところで、われわれは、人物から帰結へ、思想から制度へと移っていくことにする。経済学の巨人で私が最後にとりあげるのはケインズとなるが、それは、彼が巨人として言及に値する最後の人だという意味ではない。彼以後の人たちは、生まれるのが遅すぎたということでしかないのだ。だから、その人たちも、またその朋友たちも悲しむにはあたらない。テレビジョンは今後も存続するにちがいないのである。思想と、それがもたらした諸制度とは、この番組、そしてこの本を構築する素材となった二つの建築ブロックであり、両者は共にそれぞれの存在理由を有していると思う。

こうしたテレビジョン番組のための企画は、えてして明白で安易な分業化に陥りがちなものである。しかし、講座の内容それ自体は私自身のものであり、それをどう料理して視聴者に示すかは、BBC放

送の私の僚友たちの仕事であろう。この分業にこだわりすぎていたとしたら、その結果は、明らかに好ましくないことになっていたにちがいない。効果的なテレビ画面での提供——すぐれた企画立案、番組に関連の深い場面や写真や演出方法の検討——は、私の僚友たちが、とりあげられている思想を深く専門的にこなしえてはじめて可能となったのである。そして、事実、彼らは、そのとおりにした。しかも彼らは、そうすることによって、私の考え方に大きな影響を及ぼし、私の知識をも豊かにしてくれたのである。私が受けたこうした数々の恩恵は、本書のなかにももち込まれている。他方、これほどには一般的に言って重要ではなかったが、私は私なりに、とりあげる写真の主題や場所を提案し、時には、特定の主題がどのように視覚化できるかについても意見を述べた。

私のBBC放送との付き合いは、制作者や演出者たちだけにとどまらなかった。誰もが知るとおり、イギリス放送協会は、非常に偉大な組織である。信頼しうるテレビジョン放送業となると、BBC放送のほかに若干の会社がある程度であろう。BBCの傑出した点は、それが結集しうる従業員の質にあり、またその誰もが——すなわち有能なカメラマン、音響担当者、照明係、制作アシスタント、スタッフの面々が——制作作品に対してどこまでも責任を分かち合っているという意識に燃えている点にある。

テレビジョンにかかわった著者なら誰でも経験するように、テレビジョンは、著述とは際立った相違がある。時間の規制は非情なほどである。カール・マルクスについて話す一時間は、一部の視聴者にとっては非常に長く思われようが、マルクスの長くて緊張続きの起伏に富んだ驚くべき活動的な生涯に思いをいたすならば、それはほんの一瞬にすぎない。問題は、単純化という点にあるのではない。核心をなす点を簡潔に、そして正確かつ明瞭に述べることは可能なのであって、論者がそれをなしえなかった

とすれば、それは彼の責任であると言わなければなるまい。時間の規制は、おのずから素材選択の必要を迫る。すなわち主要ないくつかの論点に集中し、それらのあいだでさえ選択を要するのだ。そして、論者が選ぶものは、きわめて個人的色彩が強くなることを避けられず、彼がアダム・スミス、リカード、カール・マルクス、レーニンないしジョン・メイナード・ケインズについて言おうとすること、さらにはこれらの思想家を特に選びだしたということさえ、不変かつ客観的な知恵を働かした結果であるなどとは、誰も正面切って主張できるものではない。またテレビジョンの場合は、あまり包括的な話はできない。だから講師は、自らの選択が寛容に扱われることを望むしかない。批評家たち――その職業上の伝統を守って温情と寛大さに加え深い透察力をそなえた人たち――に儀礼をつくして判断の基準を提案するとすれば、それは、筆者が、従来の知識に何がしかの正しいことを加えたかどうかという点であろう。

テレビジョン番組では、話の一部は写真によって行われ、一部は言葉で行われる。誰も、写真ばかりで言葉による説明のない本の発行を考えるようなことはしないであろう。もっとも、このような立言は慎重になされねばならぬ。なぜなら当今は、出版社がほとんどなんでも本にしてしまう時代だからである。また誰も、映写幕用に書かれた文章をそのまま本にすべきではない。映画やテレビジョンの台本は、それだけでは片輪なものであって、顔のない形ともいうべきものである。それは、視聴者がただ一度のチャンスしかもち合わせていないという前提で書かれる。おそらく、この私の番組のような場合、内容の難解な部分については、視聴者が任意に見直すことができるような仕組があるべきであろうが、現実にはそれがない。書物の著者はこれとは対照的に、読者が必要に応じ、著者の言っていること、また言

わんとしていることを再確認するために、前に戻って読み返しうることを前提するのである。

この番組を準備するにあたって、まず私は、とりあげる主題のそれぞれについて慎重な論稿を書き上げた。これがもとになって、テレビジョン講座の台本ができ上がったのである。この台本を作るさい多少の修正をしたが、もとの論稿から私はこの本を書き上げた。しばしば本書では、テレビジョン番組でとりあげた想念や出来事以外のものをかなり追加する結果となっている。ありがたいことに、本の場合、著者には、一章を一時間で読めるようにせねばならぬなどという制約はない。少なくとも現在までのところ、そうだ。本書には数々の写真が載っているが、これは、話をよりわかりやすくするためである。文章は、それだけで理解してもらえるように書かれてある。さて私は、BBC放送との三年にわたる付き合いで、テレビジョンなるものをすっかり見直したのだった。とはいえ、印刷された言葉など時代遅れだとか、もう廃れかかっているなどとは信じたくはないのである。

目

次

はじめに

第一章　予言者たち、および古典的資本主義の約束……13

源流15　風景16　開祖18　理性の人たち21　農業体制23　諸国民の富26　ピンと分業28　共同行動と法人企業29　住民追放31　紡績のモデル・タウン34　インディアナ余聞36　リカードとマルサス37　リカードの見解40　イングランドとアイルランド43　海外への脱出47　スミスと現代50

第二章　資本主義最盛期の風俗と風紀……53

金持の自然淘汰54　スペンサーとサムナー56　「キリスト」の再臨60　適者はいかにして選ばれたか63　世間の評判68　自然淘汰と教会69　ソースタイン・ヴェブレン72　衒示的消費77　記念碑――ニューポート78　もろもろの儀式80　宣伝82　リヴィエラ83　賭けごと87　現代金持の風俗と風紀89

第三章　カール・マルクスの異議……95

万能の人96　トリール98　夢多き青春101　ベルリンとヘーゲル102　ケルンとジャーナリズム107　社会主義者の誕生110　共産党宣言116　革命――ただし本物ではない119　ロンドンへ126　資本論131　インターナショナル133　再びパリ137　死と生139

第四章　植民化の思想……143

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マルクスと帝国主義145　植民化の使命146　東方へ149　財政面152　スペインの偉業154　官僚制度の力156　メキシコ159　ルイジアナの場合161　ラホール164　アメリカの経験168　挽歌172

第五章　レーニンと旧体制解体の時代……176

クラカウからの展望178　領土拡張至上主義181　愚鈍さの問題184　「変異性」反応184　労働者185　ポーランドにおけるレーニン188　真の革命家190　レーニンとマルクス191　開戦と警察193　機関銃と士官階級194　スイス195　会議に次ぐ会議197　帝国主義と資本主義199　究極の試練201　革命205　再び「腐りかけた扉」208　チューリンからの展望210　対照的な西側諸国213　著者の想い出215

第六章　貨幣の盛衰……218

起源220　機能221　銀行と貨幣222　アムステルダムの光景225　一七一九年のバリ227　英蘭銀行232　紙幣238　カナダでの応用の違い239　紙幣と革命241　銀行と中央銀行243　ジャクソン対ビドル245　金248　不確実性の今昔250　連邦準備制度253　アーヴィング・フィッシャー255

第七章　エリートの革命……261

英国ケンブリッジ262　戦争と平和265　チャーチルと金(きん)269　アメリカも一役273　誰もが金持になるべきだ274　暗黒の木曜日277　解決策280　試運転282　一般理論285　大学を経由して——287　ワシントンへ290　アメリカのケインズ学派291　戦争の教訓294　勝利299　ブレトンウッズ300　ケインズの時代301

第八章　破滅的な競争 …… 306

ベルリン――一九四五年309　官僚的関心313　ベルリン封鎖315　ジョン・フォスター・ダレス318　ワシントンにおける冷戦324　不道徳を許す326　フルシチョフ328　キューバ332　奈落をのぞく334　ヴェトナム336　相利共生の罠339　経済的帰結341　変化の始まり343

第九章　巨大法人企業 …… 346

エサレン学院349　創始者352　今日のUGE355　戦闘指令部358　ワシントンの情景361　テクノストラクチュア362　アイントホーヴェンでの実践364　法人企業の世界368　なぜそれは愛されないのか369　多国籍的症候群371　ジェネラル・モーターズの後にくるもの373

第一〇章　土地と住民 …… 379

バンジャブ地方382　可能性384　産児制限384　追い出しと移住387　綿業での均衡388　メキシコ393　外来の労働者たち395　成功した事例396　都市国家402

第一一章　大都市地域 …… 407

政治的世帯408　ファテブル・シクリ409　商業都市412　工業都市415　二つのバーミンガム418　都市の経済学421　ベッド・タウン422　移民の動き425　大都市地域428　資本主義ではうまくいかぬこと430　状況の命令するところ434

第一二章　民主主義・指導力・決断……437
スイスの事例439　指導力の素質443　観客用スポーツとしての政治445　釣り合い448　指導力の性格450　ネール452　指導力とヴェトナム454　マーチン・ルーサー・キング457　バークレー458　決断461　スキドウ463　デス・ヴァレー465　核の回避466
主な謝辞……469
訳者あとがき……474
索引……494

凡　例

一、本書は John Kenneth Galbraith, *The Age of Uncertainty*, Houghton Mifflin Co., Boston, 1977, 366 pp. の全訳である。

一、原注は章ごとに一括して章末においた。引用文献については、参照したものに限って邦訳文献を付した。

一、訳注は本文中に6ポイント割注で示してある。

一、写真、イラストレーションは原書には一七八点あるが、本書では人物を中心に八八点を抽出し、掲載した。

第一章　予言者たち、および古典的資本主義の約束

ジョン・メイナード・ケインズ――今世紀に最も大きな影響を及ぼした経済学者として、広く一般に認められているケインズ――は、彼が最後に書いた最も有名な本の最後のページで、次のように述べている。「……経済学者や政治哲学者の理念は、それが正しい場合にもまちがっている場合にも、普通に考えられているよりは、はるかに強力なものである。事実、この世界はそうした理念によって支配されているといってもよい。自分ではどのような知的影響とも無縁と信じ込んでいる実際家たちも、すでに過去のものとなったいずれかの経済学者の奴隷であるのが常である」[1]。この本が書かれたのは、一九三五年だった。その頃、当時しきりに世間を騒がせていたヒトラーやゲッベルスやシュトライヘルらの雄弁と、彼らの人種理論の種本になったアルフレッド・ローゼンベルクやヒューストン・スチュワート・チェンバレンのことを思い浮かべたケインズは、さらにこうつけ加えた。「権力の座にあって天来の声を聞くと自称する気違いじみた連中も、実は数年前の三文学者の書いたものから狂気を引き出しているのでしかない」[2]。これに続けてケインズは、「……思想がしだいにその効力を発揮するのに比べると、既得権益のもつ支配力はあまりにも誇張されすぎていると思う」[3]と述べたのであった。

ケインズは、現代資本主義――または現代社会主義――を解釈する思想、したがってまた、われわれの行動の導き手になっている思想を直視する必要を説いている。確かにわれわれは、われわれが一体何によって支配されているのかを知る必要があると言うべきだろう。

ケインズ自身、自分の論点を強調しすぎてはいるが、この点はまったくそのとおりである。というのは、経済に関する事柄は、ただ単に思想によって意思決定が影響されるだけでなく、経済的既得権益によっても影響される。また環境の横暴な支配にも引きずられるのであって、この点はなかなきびしい。日常の政治的論議において、われわれは、ある人物が右なのか左なのか、あるいはリベラルか保守か、自由企業の代表なのか、それとも社会主義の代表なのかということを、非常に重視する。だが、そうしたとき、周囲の状況に押されてすべての者が――でなくとも、生き残りたいと願っているすべての者が――同じ行動をとることを強いられる場合も非常に多いことを、われわれはとかく見落しがちなのだ。人間が呼吸を続けるためには、どうしても大気の汚染を止めねばならぬとすれば、あるいはまた、経済運営の能力を立証するためには、失業やインフレを防止せねばならぬとすれば、保守であろうとリベラルであろうと、あるいは社会主義者であろうと、やらねばならぬことに大した違いはない。選択の余地は、残念ながらほとんどないのである。

われわれはまた、既得権益という考え方を、あまりばかにしてかからないほうがよい。人間には、自分たちがすでに持っているものを守り、あるいは持ちたいと望んでいるものを正当化しようとする傾向が根強い。そのため、そうした目的にかなう思想を正しいとする傾向がある。思想は、既得権益にまさる場合ももちろんであるが、その逆に、思想が既得権益の申し子である場合もきわめて多いのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com